



日本ろう者武道連合会長，手話講師

みやした あきのぶ  
**宮下 昭宣**

今年（2009年）から、デフリンピックの正式種目となった「空手」。その空手道を突き進み、世界大会でも成績を残している宮下昭宣さん。

空手との出会い、また空手を通して学んだことなど、ほとばしる汗とともに熱くお話いただきました。



### ★日本語ができない自分はダメ人間？！

生まれも育ちも埼玉県越谷市です。学校は、中学部まで足立ろう学校、高等部からは綾瀬ろう学校に通っていました。足立ろう学校までは自宅から1時間もかからないのですが、実は、小学部3年生のときに1年半だけ寄宿舎に入りました。寄宿舎では四六時中手話が飛び交っていて、まさに「ろう者の世界」。このおかげで「いつでも自分の気持ちを自由に語れ、そしてそれを理解してくれる人がいる、という環境は心地良い」ということを知ってしまいました。そのため家族には申し訳ないのですが、家族内のコミュニケーションに物足りなさを感じるようになり…。家族は皆聴者ですし、どうしても自分の言いたいことが伝わらない、親の言っていることがわからない、とストレスを感じるようになってしまったのです。それでも口話と筆談で何とかコミュニケーションをとっていました。しかし、社会に出てみると口話が全く通じない。これでも一応、ろう学校の中では「口話はうまい」と言われていたのですが、聞き返されることが多く、口話の限界を感じました。

また、日本語の読み書きもろう学校の先生からはほめられていたのですが、就職した会社の

先輩などから日本語の間違いを指摘されることが多く、「日本語ができない自分」に啞然としました。この頃は、手話が言語であることなど知らなかったので「日本語がこんなにできないなんて、自分の頭が悪いのだ」と卑下していたように思います。

20代半ばの頃、来日したあるアメリカろう者の講演を聞きに行きました。同時期に、市田泰弘さん（現在、国立障害者リハビリテーションセンター学院手話通訳学科の教官）が、「手話言語学」の話をされているビデオを友人と観たのです。それらがきっかけで、「ろう」とは何か、また「自分の手話は日本語とは違う、一つの言語である」ということを知ったのです。すると、これまで何となく感じていた違和感がすつとなくなり、気持ちが軽くなっていくのがわかりました。それからは、「ろうである自分」に誇りと自信を持ち、「私の第一言語は手話であり、日本語は第二言語である」ということを周りの人に理解してもらおうようにしています。ただ、そうはいっても特に職場では日本語は必要不可欠ですから、きちんと日本語もできなければ、と思っています。今でも、日本語の勉強は続けていますよ。

